

## 2022 年度入学式 式辞

皆さん入学おめでとうございます。神戸松蔭女子学院大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。ご列席いただいたご家族、関係者の皆様、LIVE 配信をごらんの皆様にも、感謝申し上げます。

本学の入学式ですが、すでにお分かりのようにキリスト教の礼拝形式で行っています。本学の歴史は、今から 130 年前の明治時代中頃に、イギリス人宣教師が設立した松蔭女学校にさかのぼります。今も我々は、入学式や卒業式といった行事を礼拝形式で行っています。また、キリスト教について学ぶ授業もあります。当然ですが、キリスト教の信仰を強制するものではありません。キリスト教の形式に慣れない人は、外国の文化を体験するような、新鮮な気持ちで好奇心を持って経験してもらえればと思います。これからしばらくの間、神戸松蔭という文化の中で過ごすことになったわけですから、入学式だけでなく、礼拝やクリスマス行事を体験してみてください。

本学のようなキリスト教の教育機関や教会が多いことは神戸の特徴の一つです。大学から六甲駅まで歩いて降りる道沿いにも二つの教会がありますが、今まさに両教会の桜が満開でとてもきれいです。帰り路でぜひ目を止めてください。

先ほど、本学は 130 年前の松蔭女学校から出発したと言いましたが、その歴史の中で中学・高等学校になり、次いで短期大学や 4 年制大学を創設しました。現在は学校法人松蔭女子学院が松蔭中学・高等学校と本学を運営しています。松蔭女子学院の創立 130 周年という記念の年に皆さんをお迎えすること、130 年から先の歴史をともに作っていくことを嬉しく思います。

その松蔭女子学院のモットーを紹介したいと思います。それは、「一粒のからし種」です。からしの種が一粒ということです。なぜ、からし、なぜ、一粒の種、と思った人も多いでしょう。聖書にあるイエス・キリストの言葉に由来しています。

「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」

(マルコによる福音書 4 章 30 - 32 節)

すなわち、小さな種でも、姿かたちを変えながら成長し、やがて鳥が枝に巣を作るほどの木になるという意味です。日本のからしは、木というより草で、鳥が巣を作るほどの大きさには成長しません。イエス・キリストの時代は二千年ほど前ですし、場所は中東地域ですから、日本のからしとは別の種類と思われます。いずれにしても、一粒のからし種という言葉は、大きく成長する可能性を持つ小さな種を表しています。

大学モットーは、その小さな種が大きく成長することを期待して”Open Yourself, Open Your Future”としています。Open Yourself は、自分を解放すること、Open Your Future は自分の

未来を開くことです。すなわち、学生の皆さんが、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って自分を解放し、心を開いて成長し、卒業後の未来を切り拓いていくことを期待するとともに、私たち教職員が皆さんの成長の手助けをすることを示しています。

**Open Yourself** は他者に対して心を開き信頼関係を作っていこうという意味と、新しい知識や考え方に心を開き積極的に吸収していこうという二つの意味を示しています。この **Open**、開くという言葉と松蔭女学校の創立は深くかかわっています。松蔭女学校は国が開かれた時代に、女性の可能性を開くために開設されました。

まずは、今から 155 年前に遡ります。江戸時代の鎖国政策が終わり、いくつかの港が海外に対して開かれましたが、関西地域では神戸港が唯一選ばれました。当時はまだ飛行機はありませんでしたから、港が外国と結ばれた場所でした。明治時代になって様々な商品や文化、そして人々が海外から神戸にやってきました。松蔭女学校の創立者であるヒュー・ジェイムズ・フォスもその一人で、明治 9 年に神戸でキリスト教伝道の活動を開始しました。そして、今から 130 年前の明治 25 年に、やはりイギリスから来た女性宣教師たちや日本人教師とともに、現在は異人館街として観光地になっている神戸の北野の地に松蔭女学校を開設しました。

私たちは今、情報化、グローバル化が急速に進む変化の時代にいます。しかし、現在のこの大きな変革も、明治時代に比べればまだしも緩やかな変化です。明治時代には、政治・経済という大きな枠組みから服装や暦、時間の数え方、お金の単位といった生活の隅々に至るまで、短期間で江戸時代から変わってしまいました。例えば、一年の始まりである正月は江戸時代までの旧暦より一カ月ほど早くなってしまいました。

この一年の始まりが一カ月ほど早くなったことによる混乱は、今も続いています。まだまだ寒くなっていくのに正月を新春と呼び、咲いてもいない梅の花の模様が使われるのは、旧暦の正月が今の正月より一カ月ほど遅かったためです。一方、もともとは年越しの行事であった節分は、旧暦の時期のままで行われています。また、3月3日が桃の節句と呼ばれるのは実際に桃の花が咲く時期だったからなのですが、それより一カ月ほど早く桃の花が全く咲いていない現在の3月3日も桃の節句と呼んでいるため、桃の花の時期というイメージになっています。

話しがそれてしまいましたが、現在まで混乱が続いているほど、明治時代は大きな変化の時代でした。いつの時代でもそうなのですが、すべての人が変化を喜んで受け入れたわけではありません。急激な変化は、人々を不安に陥れます。松蔭女学校ができた明治時代中頃は、変化に対する反発が強くなった時期であり、女学校特に外国人宣教師が経営する学校に対して非難の声が大きくなっていました。学校で教育を受けることで、女性の優雅さ礼儀作法を失い、家庭婦人としての美質を欠くようになるといった非難です。そこで、日本人の美風を損なう学校ではないことをことさらアピールするために、日本的な樹木である松を学校名に入れたと創立者たちは書き残しています。

当時は、まだまだ女性の可能性が限定されており、女性が自分の意志で職業を選ぶこと、自

分の生き方を選ぶことが難しい時代でした。松蔭女学校は、伝統的な考え方に気を使いながらの船出でしたが、女生徒たちは異国から来た教師たちに心を開き、自ら熱心に勉強したと創立時の校長が書き残しています。教育によって女性の可能性を開くという現在まで繋がる営みが始まったと言えます。

現代の日本では、教育を受けることがあたり前の事となっており、教育の持つ力をともすれば忘れがちです。しかし、130年前の日本では女性が教育を受けることがあたり前ではなかったことを忘れるわけにはいきません。また、世界に目を向ければ、貧困や隷属から抜け出す手段として教育に希望を見出そうとする人々は今でも少なくありません。昨年、アフガニスタンにおいて、女性が学校教育を受けることを否定してきたタリバンが政権を掌握し、アフガニスタンの多くの女性たちから悲嘆の声が上がったのは記憶に新しいところです。

教育を受けることは、単にこれまで知らなかった知識を得ることだけではありません。今は、インターネットを通じて新しい知識を昔よりずっと簡単に手に入れることができます。知りたい情報を自ら探すことができるので、とても便利です。しかし、ネットで見る情報はどうしても偏ってしまいます。

私たち人間は、自分の好みに一致した情報、自分の考え方と一致した情報を見ている方が快適です。あなたが好きなタレントやアーティストをけなしている情報よりも、褒めている情報を見る方が快適です。そういった情報をクリックして見ていると、似た情報がたくさん表示される仕組みになっています。関心がある情報、好きな情報を見ているだけでは、情報を主体的、批判的に把握し、利用できるようにはなれません。

大学で学ぶ学問の中には、そんなになぜ詳しく調べるのかわからない、社会に出たときに何の役に立つのかわからないと感じるものがあるかもしれません。学問とは断片的な知識の集まりではなく、知識を系統的に積み重ねたものです。多くの人たちがその知識や理論の正しさを実験などで証明した結果です。学問は、多くの人々が地道な研究を積み重ねて、信頼性の高い情報を残していったものです。

ある学問を学ぶことは、情報の信頼性を高めるためには地道な努力が必要なことを学ぶことであり、そうやって蓄積された知識を学ぶとともに、信頼できる知識を探す方法を学ぶことです。それは、この情報社会の中でもっとも必要とされることです。

皆さんには、変化を恐れず、新しい知識や技術を学び、これまでとは違った考え方を大学時代に吸収してほしいと思います。そして何より、自らの未来を自分自身で切り拓いていくために学び続けることができる力を身につけてほしいと思います。130年前の少女たちのように、自分自身の可能性を広げてください。

2022年4月1日 神戸松蔭女子学院大学 学長 待田昌二